建設ぶらり旅

# 松江大橋に殉じた深田清技師

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

「松江はほとんど、海を除いて『あらゆる水』を持っている。」と芥川龍之介は『松江印象記』に記したが、まったく松江は湖、川、松江城の堀の水に至るまで海以外のあらゆる水を有している。そのような地勢から市街地も、宍道湖から中海（なかうみ）にそそぐ大橋川が南北に分断しており、大正三（一九一四）年までは松江大橋のみが、町をつなぐ唯一の橋として重要な役割を果たしていた。

松江大橋は慶長十三（一六〇八）年の初代から、たびたび架け替えられて今に至り、現在の橋は一七代目となるが、建設工事中に痛ましい事故が起った。

昭和十（一九三五）年に着工した現在の松江大橋は、橋長一三四㍍、幅員一二㍍の橋体を、四基の鉄筋コンクリート橋脚で支える鋼ゲルバー桁橋で、建設工事を担当したのは島根県土木道路技師の深田清氏だった。まだ三〇歳という若さの深田氏は、自分の一生の事業として橋とともに名を残すのだと繰り返し話し、工事に尽力したという。

翌・昭和十一年九月十二日の早朝、深田氏は「今日は涼しい所に行くから」と出掛けに母親へ告げ、沈下作業が終った水面下一七㍍の鉄筋コンクリート製第一号橋脚基礎井筒底部へと向かった。内部へのコンクリート打設工事を監督するためだった。そして作業中、突然落下したコンクリート運搬用のバケットが頭部を直撃し、深田氏は帰らぬ人となった。

事故の前日、深田氏は同僚とともに事故現場となった井筒底部に入り、施工方法の打合せを行っていた。その折、親指位の砂利が落下しても当り所が悪ければ命に関わるので、物が昇降している間は隔壁の下に居て危険を避けることを忘れないように確認しあったという。このように細心の注意を払っていても事故に遭うのだから、これは運命というべきか。

深田氏は福岡県に生まれ、父親は幼いときに単身で渡米してしまい、母と祖父母に育てられた。成績が優秀だったため、篤志家から学費援助を受けることができ、京都帝国大学へ進学する。その後、島根県に職を得て橋梁の設計に従事し、母親とやはり父を亡くした従兄弟を呼び寄せ、自身は妻帯もせずに孝養と養育と仕事に励む、篤実で勤勉な生活を営んでいた。若くして亡くなった人は、神に愛されていたからだと言うが、苦労の果てにようやく前途が開けた家族から、唯一の希望を奪うとは、その御心は誠に図りがたい。

ところで、松江大橋には源助という男が、初代の橋をかける際に人柱にされたという伝説が伝わっており、事故後に深田氏はこれに付会され「昭和の人柱」などと呼ばれた。松江大橋の南詰広場には「源助柱記念碑」とともに、悲しい事故を後世に伝えるため「深田技師殉難記念碑」が建てられている。

松江大橋とともに名を残すことを望んでいた深田氏の願いは、決してこのような形ではなかったはずだが、それでも事故を悼む人々によって遭難後八〇年目を迎える本年にいたるまで、彼の名は不滅に伝えられている。

松江大橋

［交通］JR松江駅より徒歩約15分以上